

平成27年度 自己評価計画書

							石川県立金沢北陵高等学校
重点目標	具体的取組	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	判定基準	備考
1 挨拶の励行、服装容儀を整えるなど基本的な生活習慣を確立し、規範意識をより一層高めるとともに皆出席者を増やす。	① 時間厳守の指導を徹底することで、遅刻・欠席の減少と皆出席を奨励する。また、登校指導等により挨拶の励行を推進する。	生徒指導 学年 各教科 全職員	遅刻・欠席ともに減少傾向であり、引き続き取り組んでいく。欠席者数も改善されている。自ら進んで挨拶をする生徒を増やしたい。昨年度の皆出席者数は、学年平均で53人であった。	【成果指標】 皆出席者数の増加に努める。	学年あたり1年間の皆出席者数が A 100人以上であった B 70人以上～100人未満であった C 50人以上～70人未満であった D 50人未満であった	C、Dの場合、次年度の取り組みを再検討	毎学期調査
	② 服装容儀の指導を徹底し、生徒の規律・マナーの向上を目指す。	生徒指導 全職員	服装・頭髪について、繰り返し注意を受ける生徒が見られる。	【満足度指標】（生徒） 様々な機会を捉え、服装・頭髪に関する注意を与えることにより、自発的に規律・マナーの向上に努める。	自ら進んでの挨拶が A よくできている B だいたいできている C あまりできていない D ほとんどできていない	A+Bの合計が80%未満の場合次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査
	③ 生徒の行動に注意を払い、生徒の面接や保護者との連絡をより密にし、学校組織として生徒理解を深める。	保健相談 学年 生徒指導	昨年の調査では、生徒が信頼できる先生が複数人いると答える者は半数である。	【満足度指標】（生徒） 生徒の行動や悩みについて、声かけし相談に乗ってくれるなど信頼できる先生がいる。	校内でときどき声をかけてくれる先生や悩みについて相談に応じてくれるなど信頼できる先生は合わせて何人いますか。 A 3人以上 B 2人 C 1人 D 0人	A+Bの合計が80%未満の場合次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査
2 生徒の学習意欲を高めるためICT機器の活用等を通して授業改善に努め、基礎学力を定着させるとともに生徒に求められる学力の向上を図る。	① 研究授業や公開授業を積極的に行い、授業改善に努める。	教務 各教科	授業では生徒の発言や活動を促す授業展開を図るため、授業の工夫が必要である。	【努力指標】（教職員） 授業評価や研究・公開授業・授業参観などを実施し、特に少人数授業の工夫に努める。	授業では生徒の発言や活動を増やす授業の工夫に A 積極的に取り組んだ B ある程度満足できる取り組みができた C 積極的な取り組みはできなかった D ほとんど取り組めなかった	A+Bの合計が80%未満の場合次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査
	② わかる授業を行うとともに、生徒の興味・関心を引き出す授業の工夫・改善に努める。	教務 各教科	生徒の興味・関心を引き出すために、ICT機器の使用による授業改善が必要である。	【満足度指標】（生徒） 講義形式の一方的な授業ではなく、わかる授業や興味関心を引き出す授業の工夫が感じられる。	ICT機器を使用した授業に対して興味関心を A とても持つことができた B 少し持つことができた C あまり持てなかった D ほとんど持てなかった	A+Bの合計が80%未満の場合次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査
	③ 家庭での学習習慣の定着を図る。	教務 進路指導 学年 各教科	家庭学習時間が1時間未満の生徒が半数以下である。学習時間を確保する取り組みが必要である。	【成果指標】（生徒） 自主的な学習を継続的に取り組むことができた。	家庭での平均学習時間が A 1時間以上である B 45分以上～1時間未満である C 30分以上～45分未満である D 30分未満である	A+Bの合計が50%未満の場合次年度の取り組みを再検討	4月、8月、1月の調査
	④ 生徒が授業に積極的に取り組むように、ICT機器の活用頻度を高める。	各教科 教務	授業においては意欲の低い受身的な生徒も見られる。	【努力指標】（教職員） 教育ICT機器の効果的な活用や工夫に努め、生徒が意欲的に学習に取り組むように勤める。	ICT機器の効果的な活用に努めている教員の割合が A 80%以上である。 B 70%以上～80%未満である。 C 60%以上～70%未満である。 D 60%未満である。	60%未満の場合次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査

重点目標	具体的取組	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	判定基準	備考
3 組織的なキャリア教育と面談によりガイダンス機能を充実させ、生徒一人ひとりの希望する進路の実現を図る。	① 各学年に応じた進路学習を工夫し、主体的で継続的な学びができるように支援する。	進路指導 教務 学年	多様な進路希望に対応するために組織的な指導体制と生徒一人ひとりに対するガイダンス機能の充実が求められる。	【努力指標】（教職員） 本校総合学科の教育課程を理解し、多様な進路実現に向けて科目選択等の生徒への支援を充実させる。	本校教育課程を理解し、生徒への助言・支援が A 十分に助言・支援できる B おおむね助言・支援できる C あまり助言・支援できない D ほとんど助言・支援できない	A+Bの合計が90%未満の場合 次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査
				【満足度指標】（生徒） 進路行事・「産業社会と人間」・「総合的な学習の時間」を通じて、進路について意識し考えることができた。	進路行事・「産業社会と人間」・「総合的な学習の時間」の学習が進路を考える上で A 大いに役立った B ある程度役立ったと感じる C あまり役立たなかった D まったく役立たなかった	A+Bの合計が80%未満の場合 次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査
				【満足度指標】（生徒） 担任との面談を通して、自分を理解し、進路目標を定めることができた。	担任との面談は、進路目標を定める上で A 大いに役立った B ある程度役立ったと感じる C あまり役立たなかった D まったく役立たなかった	A+Bの合計が80%未満の場合 次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査
	② 各種資格・検定試験に取り組む機会を設け挑戦する意欲を喚起する。	各教科 学年 進路指導	個別指導や各種資格・検定試験に対する一層の取り組みが求められる。	【成果指標】（生徒） 各種資格・検定試験に多くの生徒が挑戦し、取得・合格数を増やす。	新たに資格・検定を取得・合格した生徒の延べ人数が A 800人以上であった B 750人以上～800人未満であった C 700人以上～750人未満であった D 700人未満であった	C、Dの場合、 次年度の取り組みを再検討	年度末に集計
	③ 保護者や関係機関と連携を深め、進路指導の充実を図る。	進路指導 学年	保護者に対する進路情報提供を工夫し内容をさらに充実させる必要がある。	【満足度指標】（保護者） 進路について、必要な情報が提供されている。	提供された情報に対して A 満足できた B ある程度満足できた C あまり満足できなかった D 満足できなかった	A+Bの合計が80%未満の場合 次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査
				【満足度指標】（保護者） 進路について、必要な情報が提供されている。	提供された情報に対して A 満足できた B ある程度満足できた C あまり満足できなかった D 満足できなかった	A+Bの合計が80%未満の場合 次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査
4 北陵「人間力UP」プログラムの中で、部活動や学校行事、地域貢献活動を通して活力ある学校生活の充実を図る。	① 部活動の活性化を目指し支援・運営する。	特活 全職員	部活動加入率は91%である。充実感・達成感を得させる指導が求められる。	【成果指標】（生徒） 部活動への加入率を高め、充実した高校生活になるよう支援する。	部活動への加入率が A 90%以上である B 85%以上～90%未満である C 80%以上～85%未満である D 80%未満である	80%未満の場合 次年度の取り組みを再検討	5月、10月に調査
				【成果指標】（生徒） 部活動への出席率を高め、切磋琢磨することを通して、豊かな人間関係を築くことができた。	部活動への出席率が A 85%以上である B 80%以上～85%未満である C 75%以上～80%未満である D 75%未満である	75%未満の場合 次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査
	② 地域行事・学校行事等に参加し、地域との連携を密にする。	特活 全職員	地域社会の一員として、社会に貢献する精神を育むことが必要である。	【成果指標】（生徒） 清掃活動や地域行事、ボランティア等に参加した（北陵アバンテを除く）。	休日も含めて1回以上参加した生徒が A 500人以上であった B 450人以上～500人未満であった C 400人以上～450人未満であった D 400人未満であった	C、Dの場合、 次年度の取り組みを再検討	7月、12月末に調査 （半期・年間調査）